

別海町歴史文化遺産「風蓮湖の氷下待ち網漁」について

令和3年7月 別海町教育委員会生涯学習課

1 概要

風蓮湖の氷下待ち網漁は、冬期間結氷する風蓮湖で行われる伝統的漁法である。氷の下に小型の定置網を仕掛けて主にコマイやワカサギを獲る特異な技術は、改良を重ねながら長年にわたって引き継がれ、今も別海町の漁業者の冬場の生活を支える糧となっている。

2 氷下待ち網漁の歴史

漁網等を使った近世の氷下漁業は、本州では長野県諏訪湖や秋田県八郎潟で盛んであった。北海道内で明治期以降本格的に行われるようになった氷下漁業は、これら二つの湖における漁法が移住者などから伝わり、その移住地の状況に合わせて改良・発展していったものと考えられる。

氷下漁業のうち、氷下に小規模な建網を敷設する氷下待ち網漁は北海道特有の漁業とされ、根室地方では畑田春松がこの漁法の開祖であり、1891～2（明治24～5）年頃より根室幌茂尻で始まったとされる（森川・田中2021下：「氷下待網漁業」、1頁）。1885（明治16）年に根室県勸業課が刊行した『管内漁獵採藻略説』には、冬期間のコマイ漁について「氷海ニ孔穴ヲ穿チ長サ七八尺ノ木柄ヲ附ケタル鉤ヲ以テ魚ノ明リヲ慕ヒ寄り来ルヲ待ち手速ニ突キ捕ル」（33頁）と記されており、この時点までは古来から行われていた鉤による漁で、漁獲量も自家用程度であったと思われる。冬期間でも大量に獲ることができ、収入を上げることができる氷下待ち網漁の導入は、この点において大きな画期であったといえる。風蓮湖でいつ氷下待ち網漁が始まったのかは定かではないが、幌茂尻と地理的に近いことから、ほぼ同時期に始まったと考えられる。なお、畑田春松はこの後1900（明治33）年に根室から現在の湧別町に移り、サロマ湖漁業開拓の祖となったことは特筆される（森川・田中2021）。

風蓮湖畔東北部に位置する走古丹には、明治の初期から藤野喜兵衛や柳田藤吉が経営する漁場の労働力として、春から秋の漁の時期だけ主に東北地方から出稼ぎにやってくる者が多数いたが、その中から徐々に走古丹に定住する者が出始めた。1889（明治22）年には風蓮湖口近くの走古丹遠太に23戸40人が定住していた（『別海沿革誌』）。鮭鱒の不漁を契機に、昭和初期に海岸地区の遠太や伏古遠太から風蓮湖畔の一本木（現在の走古丹市街地）に移り始め、風蓮湖内での雑魚漁に生業の拠点を移した。これを機に走古丹の漁民たちは、鮭鱒定置網の権利を持つ大手漁業者の雇われ漁夫の立場に強く依存する生活基盤から抜け出し、風蓮湖内の



写真1 氷下待ち網漁の様子（2021年1月26日）



図1 風蓮湖及び走古丹地図

国土地理院発行 50万分の1 地方図（北海道II）より作成

雑漁業を主体とする生活基盤の確立に将来への活路を求めたのであった（『星霜百十五年史 走古丹』、45頁）。1926（昭和元）年時点での根室管内（国後を除く）の氷下待ち網の網数は100カ統であり、そのうち走古丹は7カ統であったが（「氷下待ち網漁業」、1頁）、一本木への移住以降、冬期間も確実に漁ができる氷下待ち網漁の重要性はより一層大きくなっていったと考えられる。

同じく氷下待ち網漁を行っていた尾岱沼では、1942（昭和17）年にコマイの水揚げが40万貫（1,500トン）、26万円に達し、魚菜不足のために生のまま遠くは東京方面まで飛ぶように売れたと報じられている（『釧路新聞』1942年3月10日付夕刊）。生魚が不足する冬期間に獲れるコマイは当時大きな需要があり、氷下待ち網漁が自立しつつあった走古丹の漁民の苦しい生活を支えていたであろうことが窺える。



写真2 昭和30年代頃の氷下待ち網漁の様子
（福原義親氏所蔵）



写真3 ヤウシュベツ川河口付近の番屋（1960年頃）
（周はじめ撮影、福原義親氏所蔵）

網や漁獲物の運搬には、スノーモービルが使われるようになるまでは馬橇が使われた（写真2）。昭和30年代には、風蓮湖から馬橇で奥行臼まで運び、奥行臼駅の脇にコマイが野積みされてた風景が見られたという。（『別海漁業協同組合創立五十周年記念誌 星霜五十年』、174頁）。また、ヤウシュベツ川河口付近に氷下待ち網漁のための藁葺の番屋が置かれ、漁師たちはそこで寝泊りしながら漁をしていた（写真3）。現在は自宅から風蓮湖内の氷上の漁場にまで軽トラックで移動できるため、番屋は使われていない。

3 氷下待ち網漁の現況

現在、根室管内で氷下待ち網業に着業しているのは風蓮湖が最多で60人余り、網数は約200カ統に上る。温根沼は20人台、尾岱沼5人程度で、風蓮湖が突出している。

流水が押し寄せたり、しけの時は出漁できない外海と違い、毎日漁に出られるのが凍結した風蓮湖の氷下待ち網漁の強みである。1月早々、川の流入域で獲るワカサギから始まり、コマイ、カレイ、ニシンなどを捕獲している。

4 氷下待ち網漁の漁法

（1）網の敷設とその工夫

コマイは暗いところを好んで生息する習性があり、氷下待ち網漁はこの習性に適した漁法であると言える。氷上が操業の場所となることから、船は使用せず、ソリに網等の漁具を積み込み、スノーモービルで網の設置場所まで移動する。軽トラックも併用される。ヤウシュベツ川河口付近で、現在は湖に沈んだ「ムニウス」（アイヌ語で「草の多い所」）と呼ばれる島の北側の漁

場は漁獲が多く見込まれることから、組合員1人当たり1か所が事前の抽選により決まっている。その他の3か所は早いもの勝ちであり、事前に狙っていた場所を競争相手に取られることもある。設置場所は、結氷前に把握している「潮切り」（滞）や複雑な潮流、これまでの経験をもとに決められる。

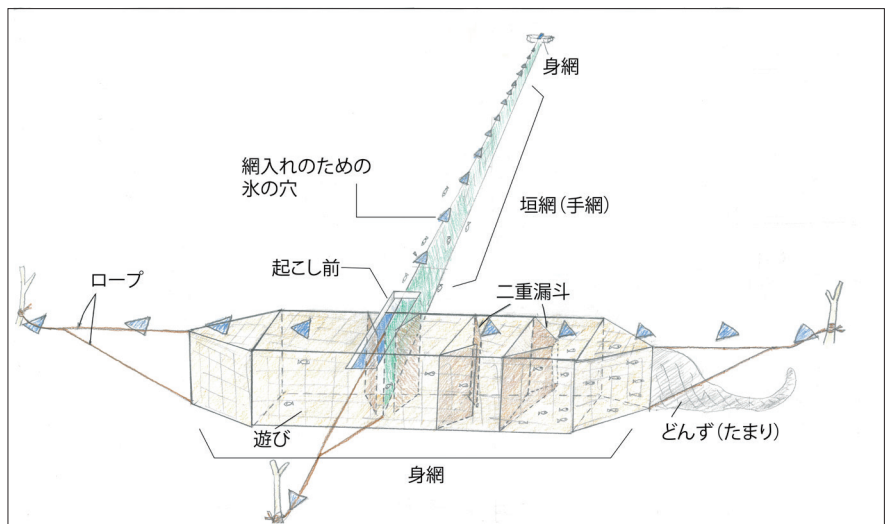


図2 氷下待ち網漁具敷設図（森川純氏作画の図から作成）

場所が決まると、氷の下に網を張っていく施網を行う(図

2参照)。設置する網は建網と同様の形状で、長さ90メートルのカーテン状の垣網（手網）と、その両端に仕掛ける、長さ約20メートルの箱形の身網から成る。垣網は網が弛まないように潮が直角に当たるよう、氷上にロープを置いて設置角度を定める。「起こし前」と呼ぶ、長辺約2メートルの長方形の氷の穴を開ける（写真4）。続いて「繰り越し」と呼ぶ、長さ6～7メー



写真4 起こし前の穴を開ける（2021年1月22日）



写真5 繰り越しを送る（2021年1月22日）



写真6 繰り越しを穴から取り出す（2021年1月22日）



写真7 起こし前から網を入れる（2021年1月22日）

ルの細長い棒をくぐらせるための小さな穴を6～7メートル間隔でチェーンソーを使って開けていく。「繰り越し」は市販の竹竿を使うこともあるが、水の抵抗が大きく潮に流されやすいため、雑木から自作した薄い板が使われる。「繰り越し」は網と繋がっており、これを氷の穴に手や足

を入れて次々に通して行き（写真 5）、最後の穴から棒を取り出し（写真 6）、人力で引っ張って氷に突き刺した棒に固定させ、起こし前から網を入れて氷の下に網を張る（写真 7）。これは網を海底で固定するアンカーと同じ役割を担う。敷設に要する時間は、家族総出で 1 カ統当たり 1 時間ほどである。

同じ風蓮湖内でも場所・狙う魚・季節あるいは漁師によって設置方法や工夫に若干の相違が見られる。垣網を張るための氷の穴毎に垣網を氷上で固定する漁師もいるが、作業時間の短縮のためにそれを行わない漁師もいる。身網の上部にふた網を付けたり、身網の中に漏斗を 2 カ所に設けて魚を湖底から中層に誘導する「登り漏斗」にするなど、試行錯誤の中で多くの魚を効率的に獲るための工夫が重ねられてきた。

（2）網敷設後から網起こしまで

網を湖底から立てるための浮子（アバ）や網の上部のロープは、干潮時などに氷と一緒に凍り付いてしまう恐れがある。このため、漁業者は市場が休みの日曜日も含め、毎日、氷の穴に手を入れて網を揺らすといった管理を行う。

網起こしは日の出前に一度行い、凍り付いてしまった「起こし前」の穴を再度チェーンソーで開け、人力で身網を引き揚げ（写真 1）、獲れた魚をタモで籠に移し、再度「起こし前」から身網を設置する。獲れた魚はその場で素早く選別し（写真 8）、市場価値のない雑魚は氷上に捨て置かれる。網揚げは毎日行うが、2 日に 1 回の漁業者もいる。



写真 8 氷上での選別の様子 (2021 年 1 月 26 日)

4 月に入り氷が解けて海へ流れ出す前には、氷上の棒にロープを結ぶ方式から湖底にアンカーを入れる方式に変更し、引き続き漁を行う。氷のない湖での待ち網漁は「水網」と呼ばれ、主な漁獲物はニシンである。

5 風蓮湖水下待ち網漁が伝える歴史的価値

このように風蓮湖の氷下待ち網漁は、この地域の歴史、とりわけ走古丹の人々が歩んできた歴史と密接に結びついている。氷下待ち網漁による冬期間の漁獲法の確立は、年間を通してこの地に定住する上で画期であり、鮭・鱒の不漁を契機に風蓮湖湾内での漁に生活の拠点を移す上でも不可欠であった。

明治中期に始まった氷下待ち網漁は、時代の変化によって輸送方法が馬からスノーモービルや軽トラックに、氷を割る道具は氷マサカリからチェーンソーになり、網の材質は木綿からナイロンになり、作業効率も高くなった。また、それぞれの漁師が風蓮湖に合った漁の方法を模索し、網などに様々な工夫が重ねられた。しかし漁の本質的な部分は明治以降ずっと変わらずに、現在まで受け継がれている。

風蓮湖内の「ムニウス」というアイヌ語を由来とする名称は、現在の地図には載っていないが、風蓮湖での漁区の基準として現在まで使われてきている。ムニウス北側のヤウシュベツ川河口付近は、多くの漁獲が見込まれる区域であり、この区域の漁の権利は抽選制が取られている。かつては、この漁場のそばの、湧き水の流れる湖畔に、氷下待ち網漁の時に使われる藁葺の番屋が置



図3 氷下待ち網漁番屋跡位置図

国土地理院電子地形図 25000「別海」より作成



写真9 氷下待ち網漁番屋跡 (2021年7月15日)

かれていた（図3参照）。この場所は現在は全く使われておらず、国道からこの跡地に繋がる旧道も消えかかっているが、ここに番屋があり、生活が営まれた歴史も語り継がれていくべきであろう。

捨て置かれた雑魚を狙ってオジロワシやオオワシが飛び回る様子は圧巻で、この時期の風蓮湖の風物詩となっている。氷下網漁で獲ったコマイは、三平汁にしたり、凍ったままマキリで削り取ってルイベにして食べるなど、漁法と共に食文化も現代まで受け継がれてきた。

一片の風物詩の陰には、この地域に生きた人々の歴史の跡が深く刻まれ、親から子、子から孫へと営々と伝統漁法を引き継いできた漁業者の地道な努力があったのである。

参考文献等

- ・「氷下待網漁業」『北海道水産試験場事業旬報』第56号(1929年)、1-4頁
- ・金田禎之『日本漁具・漁法図説(四訂版)』(成山堂書店、2016年)、398-400頁
- ・『釧路新聞』1918年2月1日付朝刊「氷下魚は大漁 鯿も亦獲れる」
- ・『釧路新聞』1941年1月27日付朝刊「氷下魚豊漁 根室近海」
- ・『釧路新聞』1941年2月17日付朝刊「厚岸『氷下待網』活況 犬橈運搬も地方色豊か」
- ・『釧路新聞』1942年3月10日付夕刊「氷下魚景気謳歌 根室沿岸既に廿六萬円」
- ・『釧路新聞』1942年4月14日付朝刊「豊漁過ぎて悲鳴 別海村尾岱沼の氷下魚」
- ・周はじめ『牧場の四季』(理論社、1961年)
- ・水産北海道協会『北海道沿岸漁業漁具・漁法図鑑』(1970年)、257-260頁
- ・水産北海道協会『北海道漁業漁具・漁法図鑑』(1981年)、264-268頁
- ・走古丹開基百十五年記念誌編集委員会『星霜百十五年史 走古丹』(1990年)
- ・福原義親氏(別海町本別海在住)からの聞き取り(2021年7月7日)
- ・別海漁業協同組合記念誌編集委員会『別海漁業協同組合創立五十周年記念誌 星霜五十年』(2000年)
- ・別海町郷土資料館『べつかいの歴史と自然シリーズ1 近世のべつかい』(2013年)、29頁
- ・根室県勧業課『管内漁獵採藻略説』(1885年)
- ・野付郡別海村外五ヶ村戸長役場『別海沿革誌』(1910年)
- ・吉田睦「本邦における氷下漁撈(概論)」『千葉大学人文研究』44号(2015年)、135-173頁
- ・吉田睦「網走湖とその周辺における氷下漁」：環境依存型漁獲活動としての考察『北海道立北方民

族博物館研究紀要』第27号(2018年)、1-14頁

- 森川純「穴から穴へ 棒で網送る 風蓮湖・氷下待ち網漁」『北海道新聞』2020年2月26日付朝刊(道東根室面)
- 森川純・田中華蓮「伝統の氷下待ち網漁 上」『北海道新聞』2021年3月2日付朝刊(道東根室面)
- 森川純・田中華蓮「伝統の氷下待ち網漁 中」『北海道新聞』2021年3月3日付朝刊(道東根室面)
- 森川純・田中華蓮「伝統の氷下待ち網漁 下」『北海道新聞』2021年3月4日付朝刊(道東根室面)